杜甫の詩に見える「鳬」について

後藤秋正

はじめに

下定雅弘「杜甫の詩の魅力」（『杜甫全詩訳注（一）』講談社学術文庫、二〇一六）の「二、独善の杜甫」の項には、「杜甫が苦難の絶えない生涯にあって、日常の中に見出した喜びとはどのようなものだろうか。」とあり、「動物への愛」について次のように簡潔に指摘する。

鳥は鶻・燕・鷗を愛した。鶻はその覇気と勇壮に憧れている。つがいの燕は杜甫夫婦の分身であり、鷗は川辺に住む杜甫の身近な住人である。

用例数から見ると鶻は「呀鶻行」、「義鶻行」、「画鶻行」といった詩題にもなっていて十例ほどが見え、燕は「燕薊」、「幽燕」、「燕趙」といった地名を除いても七十例近くがあり、鷗は三十例近くが見出せる。しかしあまり注目されないようだが、鳬もかなりの用例がある。そこで、鳬が杜詩においてどのように詠じられているか見てみたい。なお鳬には鳬という異体字もあるが、すべて鳬を用いる。

一

鳬は、チドリ科の水鳥でアヒルの原種。鳩ほどの大きさで頭部は灰色、背面は灰褐色。ケリ、カモ。ノガモ、ヤマゲリともいう。古来、身近な鳥であって、狩猟の対象となり、従って食料ともなった。すでに『詩経』に見えていて、鄭風・女曰鶏鳴には「将翺将翔、弋鳬与雁（将た翺し将た翔し、鳬と雁とを弋せよ）」とあり、同じく大雅・鳬鷖には「鳬鷖在涇、公尸来燕来寧（鳬鷖 涇に在り、公尸 来り燕し来り寧んず）」などと見える。鷖は、カモメ。前者では妻が夫に弋でカモやガンを捕ってきてくれと頼むことを、後者は尸の比喩であるが、カモとカモメがゆったりと泳いでいることをいう。

先に『文選』所収の『楚辞』中の用例を見ておくと、屈原「卜居」（巻三三）には「寧昂昂若千里之駒乎、将氾氾若水中之鳧乎、与波上下、偸以全吾軀乎（寧ろ昂昂として千里の駒の若からんか、将た氾氾として水中の鳧の若く、波と上下して、偸しくも以て吾が軀を全うせんか）」とある。波に浮かぶカモの姿は、世の風潮に従って浮沈する者の比喩である。宋玉「九弁、五首」〈其五〉（巻三三）には「鳧雁皆唼夫粱藻兮、鳳愈飄翔而高挙（鳧雁は皆な夫の粱藻を唼み、鳳は愈いよ飄び翔りて高く挙がる）」とある。群れ集まってアワや水藻を啄むカモとガンは重禄を食む臣下の小人物に喩える。また宋玉「招魂」（同前）に「鵠酸臇鳧、煎鴻鶬些（鵠は酸にし鳧を臇にし、鴻と鶬とを煎りものにす）」とあるのは、クグイを酢で煮、カモを煮付けにし、食事を準備して魂の帰りを待つのである。

ついで、『楚辞』の用例を除く『文選』中の用例からいくつかを確認しておこう。張衡「西京賦」（巻二）は長安の上林苑に集まってくる鳥を詠じて、「奮隼・帰鳧、沸卉軿訇、衆形殊声、不可勝論（奮隼・帰鳧、沸卉　軿訇として、衆形　殊声、勝げて論ず可からず）。」といい、同じく張衡「南都賦」（巻四）は、南都（南陽）における狩猟のさまを詠じて、「於是群士放逐、馳乎沙場。……、陽侯澆兮掩鳧鷖（是に於いて群士は放逐して、沙場に馳す。……、陽侯は澆りて鳧鷖を掩う）。」といい、ここでは鳧はカモメと並んで登場する。班固「西都賦」（巻一）は、長安の昆明池に集まってくる鳥を列挙して、「鳥則玄鶴・白鷺・……鳧鷖・鴻雁（鳥は則ち玄鶴・白鷺・……鳧鷖・鴻雁あり）。」という。揚雄「羽猟賦」（巻八）の、狩猟後の様子を詠じた部分にも、「鳧鷖・振鷺、上下砰磕、声若雷霆（鳧鷖・振鷺、上下し砰磕として、声は雷霆の若し）。」と、「鳧鷖」の語が見える。左思「蜀都賦」（巻四）では、蜀の沢中の鳥類を列挙した中に、「晨鳧旦至、候雁銜蘆（晨鳧旦に至り、候雁　蘆を銜む）。」と、夜明けに飛ぶカモ、「晨鳧」が見えており、李善注に、「晨鳧、常以晨飛也（晨鳧は、常に晨を以て飛ぶなり）。」とある。なお、張協「七命、八首」〈其三〉（巻三五）に、「乗鳧舟兮、為水嬉（鳧舟に乗りて、水嬉を為す）」とあるのはカモの形をした舟である。「鳧舫」、「鳧船」などともいう。

詩に目を転ずると、劉楨「雑詩」（巻二九）に見える例が早いものであろう。

職事相塡委　職事　相い塡委し
文墨紛消散　文墨　紛として消散す
……　……

方塘含白水　方塘は白水を含み
中有鳧与雁　中に鳧と雁と有り
安得粛粛羽　安くにか粛粛たる羽を得て
従爾浮波瀾　爾に従いて波瀾に浮かばん

李善注は、先に引いた『詩経』鄭風・女曰鶏鳴を引いているが、発想は屈原「卜居」に近い。劉楨の詩に詠じられる鳧は雁と並んで、職務に拘束される自身とは対照的に波間にのんびりと浮かぶ鳥である。顔延年「秋胡詩」〈其六〉（巻二一）には「鳧藻」の語がある。

捨車遵往路　車を捨てて往路に遵い
鳧藻馳目成　鳧藻して目成を馳す

「鳧藻（藻）」について李善注は、班彪の「冀州賦」（李善注引）を引くが、後漢・杜詩の「上疏」（『後漢書』巻六一、杜詩伝）に、「陛下起兵十有三年、将帥和睦、士卒鳧藻（陛下は兵を起こして十有三年、将帥は和睦し、士卒は鳧藻す）。」とあり、李賢注に、「言其和睦歓悦、如鳧之戯於水藻也（其の和睦　歓悦すること、鳧の水藻に戯るるが如きを言うなり）。」とある。カモが水草に戯れているように見えるさまから、喜び楽しむことをいう。陸厥「奉答内兄希叔」〈其二〉（巻二六）はカモとコウノトリ（クグイ）が仲間を呼んで鳴いていることをいい、陸厥が友を求めることの比喩になっている。

鳧鵠嘯儔侶　鳧と鵠とは儔侶に嘯き
荷芰始参差　荷と芰とは始めて参差たり

沈約「和謝宣城」（巻三〇）は謝朓「在郡臥病呈沈尚書」（巻二六）に和した作である。ここに見える「飛鳧の舃」はカモそのものではないが、関連する語なので取り上げておこう。

王喬飛鳧舃　王喬に飛鳧の舃あり
東方金馬門　東方に金馬の門あり

後漢の王喬の故事は、『後漢書』巻八十二上、王喬伝に見える。彼は明帝（在位五七～七五）の時に葉県（河南省葉県）の令だったが、毎月の朝謁には必ず参列した。太史に観察させたところ、双の鳧が飛来するのが見え、網で捕らえるとそれは以前、尚書の官属に賜わった一隻の舃であった。彼は仙術を用いていたのである。「鳧舃（飛舃）」の語はこれ以降、しばしば詩文に用いられるようになる。

『文選』の詩中に見られる鳧は以上の通りである。このほかの詩における用例を補っておくならば、鮑照「三日」（逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩・宋詩』巻九。以下、『宋詩』などと略記）に、

鳧雛掇苦薺　鳧雛は苦薺を掇い

黄鳥銜桜梅　黄鳥は桜梅を銜む

とあるのは、カモのひながニガナを啄んでいるのである。

謝朓の「三日侍宴曲水、代人応詔、九首」〈其四〉（『斉詩』巻三）に「既停竜駕、亦泛鳧舟（既に竜駕を停め、亦鳧舟を泛かぶ）」とあるのは、先にも触れたカモの形をした舟である。このほか梁・王金珠「阿子歌」（『梁詩』巻二八）は次のように詠じられる。

可憐双飛鳧　憐れむ可し双飛の鳧
飛集野田頭　飛びて集(いた)る野田の頭(ほとり)
饑食野田草　饑えては食らう野田の草
渇飲清河流　渇しては飲む清河の流れ

以上見てきたように、唐代以前の鳧の描写は、当初の賦においては狩猟の対象などとして詠じられていたものが、『楚辞』「卜居」の発想を承けた劉楨の詩になって、拘束のない境地に浮かぶ鳥というイメージを帯びるようになり、顔延年の詩においてもこの延長上にあることが見てとれよう。「阿子歌」では高潔な鳥として詠じられているようだが、はっきりしない。「飛鳧」の語はこれらとは別に王喬の故事から生まれたものである。

二

『杜詩詳注』（以下、『詳注』）を検索すると、鳧は、「浴鳧」という形で三例が、「鳧雁」、「鳧鷺」、「鳧雛」という形で二例ずつが見えており、このほか「鳧舃」が二例、「鳧影」、「鳧鴨」、「白鳧」、「早鳧」、「王鳧」がそれぞれ一例ずつ見えている。ただし後に触れるように「橋陵詩三十韻、因呈県内諸官」（『詳注』巻三）に、「太史候鳧影、王喬随鶴翎（太史　鳧影を候(うかが)い、王喬　鶴翎(かくれい)に随う）」と見え、「九日、楊奉先会白水崔明府」（『詳注』巻四）に、「晩酣留客舞、鳧舃共差池（晩酣　客を留めて舞わしめ、鳧舃共に差池(しち)す）」と見えている「鳧影」と「鳧舃」は、先述したように、王喬が履いた履き物（舃）である。

鈴木虎雄『杜少陵詩集』（国民文庫刊行会、一九二九）は鳧に「かも」とルビを振っていてこの語自体に注を加えない。吉川幸次郎『杜甫詩注』（筑摩書房、一九七七）も同様である。ちなみに『漢語大詞典』は「野鴨。状如家鴨而略小、肉味甚美。」と説明し、後に引く杜甫「西閣、三度期大昌厳明府同宿、不到」の句を例として挙げている。厳密には鴨はカモ科、鳧はチドリ科の鳥だが、杜詩ではともに野生のカモの意で用いられている。

まず最も用例の多い「浴鳧」から見よう。

七律「涪城県香積寺官閣」（『詳注』巻一二）は宝応二年（七月、広徳と改元。七六三）の春、梓州（四川省三台県）の西北、涪城県で書かれた。香積寺は涪江のほとり、香積山の上にあったという。

1寺下春江深不流　寺下の春江　深くして流れず
2山腰官閣迥添愁　山腰の官閣　迥かに愁えを添う
……　……
5小院迴廊春寂寂　小院　迴廊　春寂寂たり
6浴鳧飛鷺晩悠悠　浴鳧　飛鷺　晩に悠悠たり

『詳注』は「悠悠」に注して、「悠悠、物性之閒（悠悠は、物性の閒なるなり）。」といい、『淮南子』精神訓から「若吹呴呼吸、吐故内新、熊経鳥伸、鳧浴蝯躩、鴟視虎顧、是養形之人也（吹呴呼吸、吐故内新、熊経鳥伸、鳧浴蝯躩、鴟視虎顧するが若きは、是れ形を養うの人なり）。」という一文を引く。ただし『淮南子』の「鳧浴」はカモが水遊びをする姿をまねた、養生するための手足の運動だという（楠山春樹『淮南子』明治書院、一九七九）。杜詩では夕暮れ時、涪江に浮かぶカモの姿を寺から見下ろして詠じている。

五律「江亭送眉州辛別駕昇之、得蕪字」（『詳注』巻一二）は広徳二年（七六四）の春、閬州（四川省閬中市）の川縁の亭で書かれた。眉州（四川省眉山市）へ行く辛昇之を送別する詩である。

5沙晩低風蝶　沙晩れて風蝶低く
6天晴喜浴鳧　天晴れて浴鳧喜ぶ

『詳注』は、「三聯、臨別之景（三聯は、別れに臨むの景）。」といい、ここでも『淮南子』を引く。この詩でも「涪城県香積寺官閣」と同様に春の夕暮れ時に水浴びするカモが登場している。杜甫は宝応元年（七六二）の七月、長安に召還される厳武を送って成都の北北東の町、綿州（四川省綿陽市）まで行った。この頃成都では徐知道が反乱を起こし、杜甫は家族を梓州に避難させた。杜甫が厳武の再赴任を聞いて成都の草堂に戻るのは広徳二年（七六四）の春のことである。群れをなして遊ぶカモに、杜甫はあり得べき家族の姿を見ていたのではないだろうか。

次に鳧が登場するのは「大暦三年春、白帝城放船、出瞿唐峡、久居夔府、将適江陵、漂泊有詩、凡四十韻」（全八四句。『詳注』巻二一）である。大暦三年（七六八）の春、杜甫は二年ほど滞在した夔州（重慶市奉節県）を離れ、弟の杜観の住む当陽（湖北省当陽市）に行くために長江を下った。途中の風景を描いた中に次の句がある。

5窄転深啼狖　窄(せま)きに転ずれば啼狖(ていゆう)深く[1]
6虚随乱浴鳧　虚しく随えば浴鳧乱る

『詳注』は二句について、「峡窄船転、時聞猿狖啼深。虚舟随水、毎見浴鳧驚乱。二句山水並言（峡窄く船転ずれば、時に猿狖の深きに啼くを聞く。虚舟　水に随えば、毎(つね)に浴鳧の驚き乱るるを見る。二句は山水並びに言う）。」と述べる。この句は狭い峡谷を下ろうと船の向きを変えて森林に近づくとオナガザルの鳴き声が聞こえ、流れに任せて足の速い船を進めると群がって水浴びしているカモたちを驚かせることをいう。ここにも家族の投影がないだろうか。杜甫は放浪の旅を続けざるを得ないのに対して、カモは自分たちの居所を得て水浴びを楽しんでいるのである。

ついで「鳧雁」の例を見よう。「贈特進汝陽王、二十二韻」（『詳注』巻一）は天宝五載（七四六）頃の作とされる。この詩に見える鳧が杜詩に見える最も早いものである。

31樽罍臨極浦　樽罍(そんらい)　極浦に臨み
32鳧雁宿張灯　鳧雁　張灯に宿す

玄宗の甥である李璡の招宴に初めて参加した時のことを回想する二句である。時は秋、遠い水辺で酒宴が開かれると、カモや雁が巡らした灯火のもとで羽を休めているのである。[2]当時の杜甫は求職活動に懸命だった。全篇を通して李璡の人柄と詩文の素晴らしさを讃え、「淮王門有客、終不愧孫登（淮王　門に客有り、終(つい)に孫登に愧(は)じざらん）」と述べる末聯では引き立てを願う杜甫の心情がうかがえるものの、二句では夜になっても続く招宴の素晴らしさを淡々と述べている。『詳注』は『西京雑記』巻二に見える梁の孝王の築いた兔園に雁池があり、その間には鶴洲や鳧渚があったという記事を引き、さらに、陸厥「左馮翊歌」（『斉詩』巻五。『詳注』は「陸機詩」に誤る）の第三・四句「飛鳴乱鳧雁、参差雑蘭杜（飛鳴して鳧雁乱れ、参差として蘭杜に雑わる）」を引いている。

「渼陂行」（全二八句。『詳注』巻三）は天宝十三載（七五四）、岑参ら兄弟と長安西郊の湖に遊んだ時の作である。

11鳧鷖散乱棹謳発　鳧鷖(ふえい)は散乱し棹謳は発(おこ)り
12糸管啁啾空翠来　糸管は啁啾(ちゅうしゅう)し空翠は来る

舟を進めるとカモやカモメといった水鳥が散り散りに飛び立ち、船頭たちの舟歌が沸き起こって晴天が広がってくるのである。この二句は実景を詠じていよう。ただし鳧は「贈特進汝陽王、二十二韻」、「渼陂行」ともに、ガンやカモメと並列して登場し、杜甫の視線は鳧だけに集中しているわけではない。

「橋陵詩三十韻、因呈県内諸官」（『詳注』巻三）は天宝

十三載（七五四）の秋、長安一帯が長雨によって物価が高騰したために、家族を奉先（陝西省蒲城県）県令の楊慧のもとに預けようと、睿宗の陵墓、橋陵のある奉先県に赴き、土地の官吏たちに窮状を訴えた詩である。

45太史候鳬影　太史は鳬影を候い（うかが）
46王喬随鶴翎　王喬は鶴翎に随う

この「鳬影」は王喬の故事を用い、朝廷では奉先県の官吏たちがやって来ることを待ち望んでいるだろうという。また、前詩よりややのち、奉先県令の楊慧が、白水県の崔県令を迎えて開いた宴席に参加したことを詠ずる五律「九日、楊奉先会白水崔明府」（『詳注』巻四）も王喬の故事を踏まえ、「鳬舄」の語を用いて、「晩酣留客舞、鳬舄共差池（晩に酣にして客を留めて舞い、鳬舄　共に差池たり）」と詠ずる。宴席で帰る客を引き留めようと舞う楊慧と招かれた崔県令の履き物が互いに入り乱れるのである。

七絶「絶句漫興、九首」〈其七〉（『詳注』巻九）は成都に着いた翌々年の上元二年（七六一）、整備されつつあった浣花草堂で書かれた。

3筍根雉子無人見　筍根の雉子は人の見る無く
4沙上鳬雛傍母眠　沙上の鳬雛（ふすう）は母に傍（そ）うて眠る(3)

この詩において杜甫はカモの幼鳥に目を向ける。暖かな日差しのもと、カモの雛が母鳥に寄り添うようにして眠っているのである。〈其六〉に、「懶慢無堪不出村、呼児日在掩柴門（懶慢（らんまん）堪うる無く村を出でず、児を呼び日びに在りて柴門を掩わしむ）」とあるように、夏が近づく草堂での倦怠感すら伴うような平穏な一日が過ぎてゆく。「鳬雛」については先に鮑照詩の用例を見たが、補足しておくと、木華「海賦」（『文選』巻一二）に、「鳬雛離褷、鶴子淋滲（鳬雛は離褷（りし）として、鶴子は淋滲（りんしん）たり）」と見え、謝朓「詠蒲」（『斉詩』巻四）にも、「間厠秋菡萏、出入春鳬雛（秋の菡萏（かんたん）を間厠（まじ）え、春の鳬雛を出入せしむ）」とある。『詳注』は、「『夔州歌』用鶴子・鳬雛、与此詩用雉子・鳬雛同義（『夔州歌』に鶴子・鳬雛を用う、此の詩の雉子・鳬雛を用うると同義）。」と述べる。「夔州歌」は「夔州歌、十絶句」〈其五〉を指す。この歌については後に触れよう。

「通泉駅、南去通泉県十五里山水作」（全一六句。『詳注』巻一一）は宝応元年（七六二）の十一月、通泉駅（四川省射洪県の東南）で書かれた。当時、杜甫は成都の草堂に帰れず、生活は困窮していた。

渓行衣自湿　渓行して衣は自ら湿い
亭午気始散　亭午に気始めて散ず
冬温蚊蚋集　冬温かくして蚊蚋（ぶんぜい）集まり

人遠鳧鴨乱　人遠くして鳧鴨乱る

通泉駅からの眺望を詠じた冒頭部分である。『詳注』は、「此記山行之迹。暁行霑霧、至午方収。蚊蚋集、見地暖、鳧鴨乱、見境幽（此れ山行の迹を記す。暁に行きて霧に霑い、午に至りて方めて収まる。蚊蚋集まるは、地の暖かきを見し、鳧鴨の乱るるは、境の幽なるを見す）。」という。第四句は、人が近づかないので水鳥が集まって勝手気ままに遊んでいることをいう。『詳注』がいうように人里離れた奥深い場所であることを詠ずるには違いないが、カモなどの水鳥が自由に乱れ泳いでいることをいうのは成都の草堂に戻れない自身の境遇がそれとは異なることを含んでいるであろう。「鳧鴨」の語は杜詩においてはここにしか見えない。

七絶「夔州歌、十絶句」〈其五〉（『詳注』巻一五）にも「鳧雛」が詠じられる。この詩は大暦元年（七六六）の夏の終わりに、夔州で書かれた。

3背飛鶴子遺瓊蕊　背きて飛ぶ鶴子は瓊蕊を遺し
4相趁鳧雛入蔣牙　相い趁う鳧雛は蔣牙に入る

「蔣牙」は真菰の芽。カモの雛たちが追いかけっこをするように芽を出した真菰の中に分け入っていくのである。『杜臆』巻九は、「『背飛鶴子』二句、自比其不能就官、而与小人事農耕也（『背きて飛ぶ鶴子』の二句は、自ら其の官に就くこと能わずして、小人と農耕を事とするに比するなり）。」と述べ、官から離れ農民たちに混じって暮らす寓意が含まれていることを指摘する。『杜臆』は〈其三〉に、「比訝漁陽結怨恨、元聴舜日旧簫韶（比漁陽の怨恨を結ぶを訝る、元めて舜日に旧簫韶を聴く）」という、玄宗の蒙塵に言及する句があるためにこのように解したものであろう。しかしこのように解するのは飛躍がある。『読杜心解』巻六之下は先の「絶句漫興、九首」〈其七〉と比較して、「此章言水村。下二、比成都詩筍根雉子一聯較勝（此の章は水村を言う。下二は、成都詩の筍根雉子の一聯に比して較勝る）。」と述べている。

杜甫には単に「晩晴」と題する詩が三篇あるが、次の五律「晩晴」（『詳注』巻一五）は前詩と同じ大暦元年（七六六）の秋分に書かれた。後半を引く。

鳧雁終高去　鳧雁　終に高く去り
熊羆覚自肥　熊羆　自ずから肥ゆるを覚ゆ
秋分客尚在　秋分　客尚お在り
竹露夕微微　竹露　夕べに微微たり

『詳注』が「鳥獣逢秋而自得、興己之久客未帰（鳥獣秋に逢いて自得するは、己の久しく客たりて未だ帰らざる

を興す）。」と述べるように、頸聯に渡り鳥であるカモとガンは南方に去り、クマとヒグマは体重を増やしてそれぞれ越冬の準備をしていることを述べるのは、これらが杜甫に久しく旅にある感慨を喚起したからである。『杜臆』巻七はさらに踏みこんで、「後四句自写情事。『鳧鶴高去(ママ)』、己不能如鳧鶴也。『熊羆自肥』、比盗賊之横、又不可不去、乃秋分而尚在。『竹露微微』、比生計之薄也。鳧不能高飛、字恐誤（後の四句は自ら情事を写す。『鳧鶴　高く去る』は、己は鳧鶴の如くすること能わざるなり。『熊羆　自ずから肥ゆ』は、盗賊の横(ほしいまま)にするに比す、又去らざる可からざるに、乃ち秋分にして尚お在り。『竹露　微微たり』は、生計の薄きに比するなり。鳧は高く飛ぶ能わず、字　恐らく誤りならん）。」と述べる。鳧は高くは飛ばないという『杜臆』の指摘には誤認があろう。カモもガンも夔州に留まる杜甫とは違い、高く飛んで渡ってゆくのである。また『詳注』に引く黄生『杜詩説』巻七は、「語含比興（語は比興を含む）。」と述べた上で、「……五喩高蹈之士、六喩貪庸之人、既不屑為若人、又不能希若士、所以途窮作客、留滞于此（……五は高蹈の士に喩え、六は貪庸の人に喩う、既に若人(かくのごときひと)為るを屑(いさぎよ)しとせず、又若士(かくのごときし)たるを希(ねが)うこと能わず、途窮まりて客と作り、此に留滞する所以なり）。」

と指摘する。『杜臆』と同様に頸聯は比喩的表現であるとするのである。どこまで寓意を認めるかは別として、秋に暖かい南方へと渡ってゆくカモとガンの飛ぶ光景は容易に杜甫に旅寓の身であることを思い知らせたであろう。

七律「西閣、三度期大昌厳明府同宿、不到」（『詳注』巻一七）も大暦元年（七六六）、夔州の西閣で書かれた。尾聯に、「早鳧江檻底、双影謾飄颻（早鳧　江檻の底(もと)、双影謾(みだ)りに飄颻たり）」とある。夔州の東、大昌（重慶市巫山県）の県令、厳某が泊まりに来ると約束したのに訪れなかった。この句も王喬の故事を踏まえながら、厳某が来ないことを思い出すのである。

「水宿遣興、奉呈群公」（全四〇句。『詳注』巻二一）にも「鳧鷖」の語がある。

19風号聞虎豹　風に号(さけ)びて虎豹を聞き
20水宿伴鳧鷖　水に宿りて鳧鷖を伴う

杜甫は大暦三年（七六八）の正月に夔州を離れて長江を下り、二月頃、江陵（湖北省荊州市）に至った。この詩は江陵の岸辺に舟を繋ぎ、土地の幕府の諸公に生活苦を訴えた作である。生活の困窮ぶりは「童稚頻書札、盤飧詎糝藜（童稚　頻りに書札あり、盤飧(ばんそん)　詎(なん)ぞ藜(あかざ)に糝(さん)するのみならんと）」と、子供たちが藜混じりの雑炊ばかりを食べている

と手紙で訴えてくると述べていることからも歴然としている。「鳧鷖」の語は「渼陂行」にも見えた。『詳注』がこの二句について、「此水宿景事、歎旅況無聊也。……虎豹号、則地険、鳧鷖伴、則身孤（此れ水宿の景事、旅況の無聊なるを歎く。……虎豹号ぶは、則ち地は険に、鳧鷖 伴うは、則ち身は孤なり）。」と指摘する。江陵まで来た杜甫に知人はまれであり、カモとカモメだけが伴侶となっていたのである。

大暦三年（七六八）の秋の作で、石首（湖北省石首市）の県令である薛某が離任するのを見送り、薛尚書（薛景仙）に寄せた「秋日、荊南送石首薛明府辞満告別、奉寄薛尚書、頌徳叙懐、斐然之作、三十韻」（『詳注』巻二一）には次のようにいう。

3歳満帰鳧舄　歳満ちて鳧舄帰り
4秋来把雁書　秋来りて雁書を把る

これも王喬の故事に基づいて薛某が都へと旅立つことをいう。

「白鳧行」（全八句。『詳注』巻二三）は大暦四年（七六九）の十二月、潭州（湖南省長沙市）での作。杜詩で唯一、鳧（白鳧）を主題としている。全篇を見よう。

君不見黄鵠高于五尺童　君見ずや黄鵠　五尺の童より高く
化為白鳧似老翁　化して白鳧と為りて老翁に似たるを
故畦遺穂已蕩尽　故畦の遺穂　已に蕩尽し
天寒歳暮波濤中　天寒く歳は暮る波濤の中
鱗介腥膻素不食　鱗介の腥膻は素より食らわず
終日忍饑西復東　終日　饑えを忍びて西し復た東す
魯門鶢鶋亦蹭蹬　魯門の鶢鶋（えんきょ）も亦蹭蹬（そうとう）たり
聞道于今猶避風　聞道（きくなら）く今に于（おい）て猶お風を避くと

「白鳧行」は杜甫によって工夫された新題楽府である。杜甫以前に「白鳧謡（『北史』巻五一、高元海伝、『古詩紀』巻一一二）」があり、これには「白鳧翁」の語はあるものの、杜甫の「白鳧行」との関連は見られない。また「白鳧」の語もこの楽府を除けば杜甫以前には見られない。鳧が詩題になっているためであろうか、『詳注』は「鳧水鳥也。李巡曰、野曰鳧、家曰鶩（鳧は水鳥なり。李巡曰く、野を鳧と曰い、家を鶩と曰う）。」と、この通りの一文は見られないが、ここでは『爾雅』釈鳥と注を引いている。野生のカモを鳧といい、飼い慣らされたそれを鶩（アヒル）ということを示すのだが、この詩における「黄鵠」は『詳注』が「黄童化為老叟、此黄鵠白鳧之喩也（黄童は化して老叟と為る、此の黄鵠は白鳧の喩えなり）。」と指摘するよ

うに比喩として用いられる。幼児の背よりも高かった「黄鵠」（黄色みを帯びたハクチョウ）が年老いて「白鳧」に変貌してしまったのである。もちろん朱鶴齢『杜工部詩集輯注』巻二十が、「黄鵠化為白鳧、不能飛挙矣、猶五尺童化為老翁、不復少壮矣。此自傷衰暮之語（黄鵠は化して白鳧と為り、飛挙する能わず、猶お五尺の童の化して老翁と為り、少壮に復らざるがごとし。此れ自ら衰暮を傷むの語）。」と指摘するように、落ち穂も啄み尽くし、かといって生臭物を摂ることも潔しとせずに波間に浮かんでいる「白鳧」は老いた杜甫の象徴である。(4)「白鳧行」における比喩から考えても、先に引いた成都とその周辺で書かれた数篇に見える鳧に、家族の投影を看取することはあながち飛躍とはいえまい。

最後に鳧が登場するのは「白鳧行」の書かれた翌大暦五年（七七〇）の春、同じ潭州での作「奉贈蕭十二使君」（全三六句。『詳注』巻二三）である。

1昔在厳公幕　昔　厳公の幕に在りて
2倶為蜀使臣　倶に蜀の使臣と為る
……　……
7王鳧聊暫出　王鳧　聊か暫く出で
8蕭雉只相馴　蕭雉　只だ相い馴るるのみ

第七・八句について『詳注』は、「王鳧用県令事、蕭雉用郎官事、蕭蓋先為郎而後貶為令也（王鳧は県令の事を用い、蕭雉は郎官の事を用う、蕭は蓋し先に郎と為りて後貶せられて令と為るなり）。」という。蕭十二使君はかつて杜甫とともに厳武の幕府に仕えており、その後、尚書員外郎を経、いったんは出されて県令となり、杜甫と潭州で出会ったときには湖南の刺史となっていた。「王鳧」は蕭使君がかつて県令となったことを、「蕭雉」は蕭使君と同姓の前漢・蕭芝が役所に往復するたびに飼っていた数十羽の雉が見送ったり出迎えたりしたという故事を踏まえて、蕭使君が県令に出されたものの、厳武の幕府で再び郎官となったことをいう。固有名詞にちなんだ語であるためか、「王鳧」も「蕭雉」も杜甫以外の詩には見られない。

おわりに

以上、杜詩に表れた「鳧」の描写の諸相をたどってきた。杜詩においても王喬の故事を踏まえた語である「鳧舄」が「九日、楊奉先会白水崔明府」と「秋日、荊南送石首薛明府辞満告別、奉寄薛尚書、頌徳叙懐、斐然之作、三十韻」とに用いられる。この語はすでに沈約「和謝宣城」に見られるので、伝統的な詩語であったと言える。しかし杜甫は、

これを「橋陵詩三十韻、因呈県内諸官」においては「鳬影」に、「西閣、三度期大昌厳明府同宿、不到」においては「早鳬」に、「奉贈蕭十二使君」においては「王鳬」にと、いずれも王喬の故事を念頭に置きながらも、これに工夫を加えて、新たな語を創造したのである。

次に三例が見える「浴鳬」の語に着目してみよう。この語に近い例は鮑照「蜀四賢詠」（『宋詩』巻八）の冒頭に「渤渚水浴鳬、春山玉抵鵠（渤渚は水　鳬を浴せしめ、春山は玉　鵠を抵とす）」とあるが、この語自体は『佩文韻府』巻七に杜詩の用例のみを掲げるように、杜甫以前には見られない、杜甫によって工夫された語である。「浴」について見てみるならば杜詩に「浴」は十二例がある。そのうち特に注意されるのは以下に挙げるように鳥と結びつけて用いる例が多いことである。

已添無数鳥　已に添う無数の鳥
争浴故相喧　争い浴して故に相い喧し
「春水」（『詳注』巻一〇）

江鸛巧当幽径浴　江鸛　巧みに幽径に当たりて浴し
隣鶏還過短牆来　隣鶏　還た短牆を過ぎて来る
「王十七侍御掄許携酒至草堂、……」（『詳注』巻一〇）

晴浴狎鷗分処処　晴れて浴する狎鷗は処処に分かれ
雨随神女下朝朝　雨を随うる神女は下ること朝朝
「夔州歌、十絶句」〈其六〉（『詳注』巻一五）

雪暗還須浴　雪暗きも還た須く浴すべし
風生一任飄　風生ずれば一に飄すに任す
「鷗」（『詳注』巻一七）

盤渦鷺浴底心性　盤渦に鷺の浴するは底の心性ぞ
独樹花発自分明　独樹に花の発くは自ずから分明
「愁」（『詳注』巻一八）

これらの要素を一語にしたのが「浴鳬」の語であろう。この「浴」と「鳬」を結びつけた語は、カモが羽を振るわせて水浴びする姿を的確に捉えている。しかもさらに注目すべきはこの語は成都とその周辺を往来していた時期と夔州滞在時期に限って表れることであり、「浴」を鳥と結びつけて用いる例も同様である。とりわけ「鳬雛」の語が用いられるのは、成都の草堂と夔州にいた時期に限られている。この語に象徴的に見られるように、長い旅の途中、両地でしばしば家族とともに平穏な日々を過ごすことができた杜甫は、自身の家族の姿を鳬とそのヒナに見出したのである。もともと鳬には劉楨の詩に見られたように拘束のない

境地に遊ぶ鳥というイメージを帯びることがあった。繰り返しになるが、杜甫はこれを平穏に過ごす家族のイメージと重ねるために「鳧雛」に着目したのである。

　また「鳧鷖」の語について補足しておくならば、羅隠（八三三〜九〇九）、字は昭諫には、この語を用いて杜甫を弔った七律「湘南春日懐古」（『全唐詩』巻六五六）があり、次のように詠じた。

晴江春暖蘭蕙薫　晴江　春暖かにして蘭蕙薫る
鳧鷖苒苒鷗著群　鳧鷖　苒苒として鷗は群れに著く
洛陽賈誼自無命　洛陽の賈誼は自ずから命無く
少陵杜甫兼有文　少陵の杜甫は兼ねて文有り
空闊遠帆遮落日　空闊たる遠帆は落日を遮り
蒼茫野樹礙帰雲　蒼茫たる野樹は帰雲を礙（さまた）ぐ
松醪酒好昭潭静　松醪（しょうろう）　酒好くして昭潭静かに
閑過中流一弔君　閑に中流を過ぎて一に君を弔う

　杜甫はどこに逗留している時でも渡り鳥でもある鳧の姿に自身の姿を重ねていた。その到達点が「白鳧行」として結晶している。この楽府における羽の白くなった鳧は杜甫が新たに造形したものであったが、この白鳧は杜甫の自画像となったのである。このことが南宋・咸淳七年（一二七一）の進士、黎廷瑞（?〜一三〇八）、字は祥仲に強い印象を与えたのであろう。彼は「白鳧行」を踏まえた五絶「贈山翁」（『鄱陽五家集』巻一）を残している。最後にこの詩を引いておこう。「大程」は北宋・程顥（一〇三二〜一〇八五）、字は伯淳を指す。「堯夫」は北宋・邵雍（一〇一一〜一〇七七）の字。

浮雲鬱鬱成蒼狗　浮雲　鬱鬱として蒼狗を成し
黄鵠高高化白鳧　黄鵠　高高として白鳧と化す
惟有大程窺此妙　惟だ大程のみ此の妙を窺う有り
不将算法問堯夫　算法を堯夫に問うを将（もち）いず

　羅隠が杜詩に親しんでいたことは知られているが、黎廷瑞もまた杜甫の理解者であったといえよう。(5)

注

（1）この句を鈴木虎雄『杜少陵詩集』（国民文庫刊行会、一九三一）は、「窄には転ず深啼の狖、空しく随う乱浴の鳧」と読む。

（2）「鳧雁」の句について成善楷『杜詩箋記』は『詳注』の見解を否定して以下のように指摘する。

　仇訓「宿」為「鳧宿池辺樹」的宿、誤。拠所引『西京雑記』、這句詩的「鳧」和「雁」、当是雁池・鳧渚的借代、指池和渚。……「鳧雁宿張灯」、承上句「罇罍臨極浦」、写鳧渚雁池早已張灯、準備游宴的盛況。……。

（3）この句については拙稿『稚子』と『雉子』と―杜甫「絶句

漫興、九首」〈其七〉—」（拙著『杜甫詩話―何れの日か是れ帰年ならん』研文出版、二〇一二所収）で論じたことがある。

（4）曹慕樊『杜詩雑説』（四川人民出版社、一九八一）、鄭紹基『杜詩別解』（中華書局、一九八七）にも、この楽府の寓意についての言及がある。後者は典拠を博捜していて詳細である。

（5）五律「風雨」（『鄱陽五家集』巻五）に、「詩添子美痩、酒減次公狂（詩は添う子美の痩、酒は減ず次公の狂）」とある。